社 SHA
楽 RAKU

神奈川県立川崎図書館 が所蔵する
全国有数の〈社史コレクション〉を
さらに活用していただくため、
社史の使い方や、社史の楽しさ、
社史情報などをお届けしていきます。

Vol.63

2016/12

# 海賊とよばれた出光

百田尚樹の小説「海賊とよばれた男」が映画化されました。岡田准一が演じる主人公の国岡鐵造のモデルは、出光興産創業者の出光佐三（いでみつ・さぞう）です。

出光興産の社史を見ると、映画と重なる場面や、映画には登場しないエピソードもたくさん記されていました。映画を観た方は「実話ではこうだったのか」や「この話は知らなかった」と、これから観ようという方は「映画ではどう演じられているのだろう」と想像しながらご一読ください。

出光興産の社史から、主に、出光佐三の聞き書きを中心とした『出光五十年史』（１９７０年刊）および近刊の『出光１００年史』（２０１２年刊）より紹介します。

●

佐三は１８８５年、福岡県で生まれました。明治末頃、佐三は神戸高等商業学校に学びます。水島校長らからは「金よりは人間だ」「人が中心だ」「人が立派にしとればよい」そして「人を育てるには愛情、温情で行けばよい」「それが一致団結して、家族主義みたいなもので行けばよい」と学び、のちの出光精神の根底になります。卒業論文「筑豊炭及若松港」は、石炭に対する石油の優位性を述べたものでした。

在学中、資産家の日田重太郎と知り合いました。日田は佐三を気に入り「京都の別荘が売れたが、その代金を基にして、商売をしてみてはどうか」と申し出ます。「金は返すに及ばぬ。借用証書など入れる必要はない。利子もいらない。ただあくまで主義を貫け。家族仲良く暮らせ」と言いました。佐三はこの資金をもとに、１９１１年に門司で出光商会を創業しました。

創業後まもなく漁船の燃料販売を始めました。灯油より安価な軽油、さらにより安価な未洗い軽油を販売し、需要家の便宜を図ります。下関の漁船にも海上で販売をしました。「出光の区域じゃないが」と苦情が出ますが、佐三は「じゃないがというたって、海上には区域はないじゃないか」と言い返しました。「苦しまぎれに、ひょこっと出た言葉」だそうです。「それで出光は海賊ということになった」と佐三は笑いながら語っています。

（裏面につづく）

（表面からつづく）

その後、大陸にも進出するなど、出光は発展をしていきました。関東大震災が起こったときに「なにか儲けるタネはないか」といっていた社員には「このように国家が災害を受けた時期に、それをタネに儲けるようなことをしたらいかん」と退けたそうです。佐三は手が黄色くなるほどの愛煙家でした。もし国民全体が一年、煙草をやめたら関東大震災で無くなったものくらいの額になると考えました。現実的ではないにせよ、「出光だけはそういう心持でいこうじゃないか」と思って、禁煙をして貯金をしていきました。そのお金は戦争中に献納飛行機となったそうです。

日本が終戦したときのことを佐三は「なんといっても、終戦のときのわれわれ出光人の考え方は、一般国民とはもう白と黒ぐらい違っていたんだよ」と語っています。国民の多くは戦いに敗けたと思ったが、出光の社員は、戦いには敗けたけれど精神的には日本人が勝った、人間的には打ち負かされていないと感じていたそうです。終戦から二日後の８月１７日、佐三は「玉音を拝して」という訓示をします。その内容は『出光五十年史』に９ページにわたって掲載されています。

戦争から復員したある社員は「私どもは戦争には敗けました。けれども店主（佐三）に授けられた使命は完全に果たしてきました」と報告しました。

---

終戦後、旧海軍の残したタンクの底に残油がありました。連合軍（ＧＨＱ）はこの残油を処理して有効活用するように日本政府に命じます。ただし海軍が放置せざるを得なかったくらい作業は困難で、引き受け手がありません。出光が引き受けましたが、油の集積は機械ではできず、人手によって汲み出すしかないものの人命に危険がある難事業だとわかりました。結局、出光の社員がタンクの底に入って行うことになりました。黙々と働く作業員を見ていた官庁や財界の人々は感激しました。また「こういう商社が日本にあるとは思わなかった」と融資をしてくれた銀行もありました。損失のでる事業となりましたが、２万キロリットルの廃油を回収できたそうです。『出光１００年史』には、作業中の風景や油にまみれた社員の写真が掲載されています。

映画のクライマックスシーンのひとつは、自社タンカーのイラン派遣です。「日章丸事件」として話題になり、出光興産が刊行した**『ペルシャ湾上の日章丸』**（１９７８年刊）、**『アバダンに行け』**（１９８０年刊）にも詳しく出ています（いずれも所蔵）。

１９５３年５月、ガソリンと軽油を満載した日章丸は、裁判所に差し押さえられないように土曜日の午後を選び、当初に伝えられていた徳山ではなく、川崎に入港しました。

（科学情報課・高田）

●お問い合わせ先　神奈川県立川崎図書館　科学情報課
210-0011　川崎市川崎区富士見２－１－４
電話：044-233-4537　ＦＡＸ：044-210-1146
http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/kawasaki/index.html